この人この経営

新・農・業・人

非農家のサラリーマンから試行錯誤し農業独り立ちエゴマの大規模生産開始

AGURI MOON（アグリムーン）
柴原 信行

春、エゴマを定植する柴原信行さん

エゴマで理想の農業

シソ科の一年草「エゴマ」。その種を搾った油はα－リノレン酸を多く含み、近年、健康を重視する高齢者を中心に消費が広まっている。また、その葉は香草として韓国料理などに多く用いられる。

日本では縄文時代から食用され、全国で多くの在来品種が生産されてきた。福島県・岐阜県などと並び有数の産地である島根県で、エゴマとそれを取り巻く人々に魅了され、理想のエゴマ生産に汗をかいている人がいる。千葉県からIターン就農した柴原信行さん（49歳）だ。

柴原さんの作付面積は1ヘクタールと居住する川本町内では最大規模である。収穫した種は搾って油に、葉はお茶にそれぞれ加工して、町内の道の駅やホームページで販売している。主力商品の油は収穫後天日干しした種を使用した一番搾りの高品質なもの。地域に根差した商品として、ふるさと納税の返礼品としても人気が高い。

実家はサラリーマン家庭、大学は工学系と、農業と無縁だった柴原さんの就農のきっかけは家庭菜園。

大学卒業後、転職を経てバッテリー保護部品メーカーで勤務した。需要拡大に伴い長時間勤務が重なるなか、心身に疲れを感じ気分転換に目を向けたのが家庭菜園だ。市民農園を5坪ほど借り、土いじりをする心の安らぎを覚えた。菜園づくりにのめりこんだ柴原さんは、やがて田や畑にかかわる仕事がしたいと思うようになった。

2012年以降、全国各県の主催する就農相談会に参加した。野菜の生産現場も実際に見学して実感したことは、農業で生計を立てることの難しさだった。

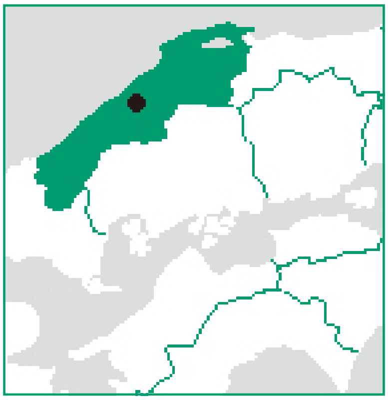
「技術もなく、非農家で後発組の自分が農業で生活するためには、ほかの人があまり取り組んでいない作目で挑戦しなければ厳しいと思いました」と柴原さんは語る。

柴原さんは、農業の歴史や文化に関する文献をあたり、エゴマにたどり着いた。さらに、生産地域などを調べ、川本町がエゴマ生産を振興していることや、川本町で40アールのエゴマ生産・油加工・販売をおこなう竹下禎彦（よしひこ）さん（80歳）が、地域活性化に尽力されていることを知った。直接会ってエゴマ生産について相談したい気持ちが高まった柴原さんは県主催の就農バスツアーを利用し竹下さんを訪れた。

遠路訪れた柴原さんに、竹下さ

新・農業人　この人この経営

所在地●島根県川本町
就農時期●2016年
経営規模●1ha（作付面積）
事業内容●エゴマの生産・加工・販売
URL●https://agrimoon.jp/



んは川本町のエゴマ生産の現状を率直に明かしてくれた。

「エゴマだけで食べていくには相当の経営規模が必要となり、甘い世界ではない。ただ、エゴマは本当に体に良いものであり、一人でも多くの人に健康になるように食べてほしい。一緒に地域を盛り上げよう、という熱い気持ちをお話しいただきました」と柴原さんは語る。

人に惹かれて就農

竹下さんの人柄やエゴマ生産に対する熱い姿勢に魅かれ、エゴマ生産に心が傾いた柴原さんに、川本町から追い風となる提案があった。

就農前に2年間、町の嘱託職員として、竹下さんから技術指導を受けながら就農の準備をしないか、というのだ。願ってもない町の支援姿勢に意を強くした柴原さんは、Iターンによる就農を決意した。

2014年に家族とともに川本町に移住し、「地域おこし協力隊」として竹下さんの下で2年間の研修を受講。16年2月に独立・新規就農を果たした。70㌃の田を借り受け、営農をスタートした柴原さん。2年間の準備期間もあり、順風満帆に生産が進むかと思いきや、これがピンチの連続だった。

休耕田を利用した作付けであり、畑と比べ水はけが弱く、苗の根が張りにくいという問題に始まり、虫が発生し被害を受ける、保管庫の整備が追いつかず、収穫したエゴマが雨に濡れて廃棄せざるを得なくなる、などの課題が頻発した。

なお、エゴマが在来種のため、生産のノウハウが確立されていなかったことが課題解決を難しくした。

しかし、竹下さんをはじめとする近隣の先輩農家は快く柴原さんの相談に応じてくれた。そのため、直接の解決策とならなくても、ヒントをつかむことができ、一つ一つ課題を解決できた。さらに搾油に際し、竹下さんが土地、建物を提供してくれたため、独自の搾油所の設置、「おらが油」の生産が可能となった。

周囲からフォローを受けて試行錯誤した結果、現在、経営面積は1㌶、19年の種の生産量は640㌔グラム、油にして200㌔グラムほどまで増加した。

採算ベースの農業経営

現状順調に生産量は増加しているものの、経営安定化実現にはさらなる面積拡大が必要だ。そのため、今後、必須となるのが機械化。現在、周囲の農家から借り受け、農地自体は3㌶ほど確保しているが、手が回らないため、作付けは1㌶にとどまっている。

土壌改良や収穫時などあらゆる段階で機械化は必要だ。しかし、就農から3年間は資金の余裕がなかったことに加え、川本町のエゴマ農家の大半が小規模で機械化が進んでおらず、周囲から借り受けるということもできなかった。今後は省力化対応を最優先に、機械化を進めていく。

「まずはエゴマの種の効率的な収穫・脱穀のため、コンバインがほしい。理想とする少人数による高生産性農業の実現にむけ、少しずつでも機械導入を継続します」と柴原さんは語る。機械化を実現し、作付面積を2㌶まで拡大した時に、経営安定化が見えてくる。

また、柴原さんは地域とのかかわりもより深めたいと考えている。竹下さんの取り組みや人柄にひかれてIターン・就農した柴原さんは、竹下さんの築いた技術やブランドそして理念の承継は自分の使命と考えている。また、地域に快く受けいれてくれた方々への恩返しの意味も込め、この地に永住し、地域を盛り上げたい。そのためにもまず自分の経営を安定させて足場を固めることに全力を注ぐ。

「町には私の他にも外から移住しエゴマ生産に取り組まれている方がいます。皆で切磋琢磨し地域のエゴマ生産を守っていきたいです」

人に惚れ、人に信頼され、未来を託される。地域一体となって発展する農業がそこにある。

（情報企画部　高雄 和彦）